

機関番号：35406

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19730349

研究課題名（和文）個人化する社会における新たなる社会的連帯の構築に関する研究
—労働問題の心理学化—研究課題名（英文）Study of the new “the social” in individualized society
—psychologicalization of labour problems—研究代表者 山田 陽子 (YAMADA YOKO)
広島国際学院大学・現代社会学部・講師
研究者番号：10412298

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、産業・労働領域における「心理学化」や「医療化」に関する理論的研究ならびに質的調査を行い、「個人化」する社会における社会的連帯の可能性について考察することである。メンタルヘルスケアの現場での参与観察や EAP（従業員支援プログラム）会社の関係者にインタビュー調査を行うことによって、従来であれば政治経済的な次元で議論されていた労働問題や人的管理が「心の健康管理」の問題として再定義されていくプロセスと、その社会的帰結について明らかにし、そのことを通じて「個人化」した社会での社会的連帯について検討している。

研究成果の概要（英文）：

Main purpose of this study is reconsideration “the social” in the “individualized society” through theoretically study, the qualitative research and participant observation about “ psychologicalization” or “ medicalization” in the industry fields. I clarify the process and consequence which labour problems argued in political arena in the past turn into mental health problems argued in psychological or medical arena today.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	0	0	0
2010 年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,000,000	360,000	2,360,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学

キーワード：感情資本主義、感情管理、医療化、心理学化、個人化、メンタルヘルス、EAP、自殺

1. 研究開始当初の背景

近年の日本社会では、「職場うつ」や過労

自殺が社会問題化するとともに、ビジネスパーソンのメンタルヘルスケアに対する関心も高まっている。メンタルヘルス不全による休職者の数が増加し、多くの企業が社内相談室制度を有するようになってきている。管理職向けにメンタルヘルス研修を行ったり長時間労働者に対する面接相談を実施する企業も多い。運動方針にメンタルヘルスケアを組み入れている労働組合も過半数に上る。

P.L. バーガーは著書『Facing up to Modernity (1965)』の中で、抑圧や無意識などの精神分析的な語彙によって人々の経験が解釈され、秩序立てられていく現象を社会学的分析の俎上に載せた。また、R. ベラーらは「セラピー文化」が浸透したアメリカ中産階級の「心の習慣」をインタビュー調査によって明らかにしている。さらに、医療化論の文脈では、DSM の普及によって、人生における迷いや悩み、些細な逸脱行動に診断名が付され、治療の対象となることが「不幸の医療化」(R. W. Dorkin) や「日常のふるまいの病気化」(H. Kutchins & S. A. Kirk) という形で議論されている。

一方、日本では、より良い「心のケア」や「心の教育」とはいかにして可能かという技術的・方法論的議論は行なわれても、その社会的文化的意味を根本から問うような社会学的分析は少ない。森真一による「心理主義化」論や檜村愛子による「心理学化」論があるが、管見のかぎり、第一次資料をもとに分析を行った研究は僅少である。

筆者は、E. デュルケームの「人格崇拜」論について、E. ゴフマンの儀礼的相互行為論や A. ホックシールドの感情マネジメント論への学説史的展開を明らかにすることによって「心理学化」の社会学的由来を理論的に考察してきた。

また、子どものメンタルヘルスに関するフ

ィールドワークを行い、道徳が「心理学化」していることを明らかにした。「心の従業」では、不登校やいじめ、「キレル」などの逸脱行動が「ストレス反応」とみなされており、それゆえ、いじめや殺人の禁止といった「人格の相互尊重」という道徳的課題は、ストレスのマネジメントや感情のコントロールという技術的課題として教えられている。

これらの理論的研究およびフィールドワークにおける研究成果は「心理学的知識の普及と『心』の聖化」(『社会学評論』vol. 53-3, 380-395, 2002 年) や「『心』の聖化と現代人の自己形成—「心の教育」における道徳と『心理学』の交錯」(『ソシオロジ』vol. 149, 85-101, 2004 年) として発表し、博士論文『道徳的個人主義の展開と心の聖化』(神戸大学 2003 年) としてまとめた。さらに、それらをもとにした単著『「心」をめぐる知のグローバル化と自律的個人像—「心」の聖化とマネジメント』(学文社, 2007 年) を刊行している。

これらの社会状況、先行研究ならびに筆者自身の研究成果を踏まえ、労働の領域における「心理学化」や「医療化」に関する研究を理論的・実証的にすすめるというのが本研究の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、産業・労働領域における「心理学化」や「医療化」に関する理論的研究ならびに質的調査を行い、「個人化」する社会における社会的連帯の可能性について考察することである。労働者のメンタルヘルスやストレスマネジメントに関する社会的動向に着目することを通して、「個人化」し、社会の姿が見えにくくなる中での社会的連帯をどのように考えていくのかという点について理論的・実証的に検討することが本研究の目的である。

これまで、医療社会学の文脈では狂気や精神疾患の医療化についての議論が、心理主義化論や心理学化論の文脈ではカウンセリングやメンタルケアに関する社会学的分析がそれぞれ行われている。また、産業社会学や組織社会学の文脈において E. メイヨー等が感情が職務上のパフォーマンスに与える影響について議論してきた。しかしながら、ビジネスパーソンのメンタルヘルスケアに特化した社会学的分析はこれまでに十分に展開されてきていない。

それゆえ本研究においては、ビジネスパーソンのメンタルヘルスケアについて、現代人の感情を取り巻く産業、福祉・医療、文化の結節点とみなし、社会学の観点から捉えなおすことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 2007 年度には、知識社会学的な観点からビジネスパーソンのメンタルヘルスをとり巻く知の布置連関について整理を行った。まず、近年のビジネスパーソンのメンタルヘルスをめぐる法や社会制度に注目し、メンタルヘルスをめぐるエージェントービジネスパーソン、上司・管理監督者、産業医や EAP などと専門知や介入テクノロジーの様相について、メンタルヘルス関連の法令や官公庁発表の統計資料の整理、EAP 会社の人へのインタビュー調査、産業保健スタッフや人事・労務担当者を対象としたメンタルヘルス研修での参与観察などから明らかにした。

具体的には、2007 年年 1 月から 2 月にかけて広島県立総合精神保健福祉センターにおいて実施された「平成 18 年度こころの健康づくり関係職員研修」に同席し、「心の健康」に関する国内外の動向や施策について資料収集を行った。本研修会の講師は、自殺予防対策で知られる精神科医、広島地域の産業保健推進センター所長、精神保健福祉センター

所長、いのちの電話関係者などである。本研修会の対象は、市町の自殺対策担当課長及び担当者、保健所保健師、地域包括支援センター職員等である。「心の健康」に関する最新情報と現場の関係者の動向を把握する格好の機会となった。

また、2007 年 7 月には、過労殺者の遺書の展覧会にて、主催者の方から「働く者のメンタルヘルス相談室」設置の経緯や相談内容の傾向などについて話を聴いた。

さらに、2007 年 8 月には、日本で初めて EAP（従業員支援プログラム）を機能させた EAP 会社「イーブ」東京本社にてインタビュー調査を行った。イーブ社が提供しているメンタルヘルスサービスの内容、EAP の導入手順の実際、顧客である企業のニーズ、日本の EAP の現状と今後などについて話を聴くとともに資料を収集した。

また、2007 年 9 月に東京で開催された『職場のメンタルヘルス対策講演会』における基調講演、シンポジウム、配布資料、登壇者の発言なども一時資料として分析対象としている。この講演とシンポジウムでは、EAP の開発設計担当者であり世界的権威でもある D. マッシー教授、日本の精神科医、精神科産業医、中央労働災害防止協会メンタルヘルス推進センター所長、EAP 会社の役員、一部上場企業の人事労務部門幹部が一同に会し、官民間問わず、日本の職場のメンタルヘルスの現状と今後の対策について議論がなされた。

(2) 2008 年度には、メンタルヘルスケアを受ける側であるビジネスパーソンが過重労働や長時間労働についてどのように考え、どのような形で時間管理を行っているのか、すなわち、ビジネスパーソン自身が仕事と時間と自己の関係をどのように捉えているのかを明らかにするために、ソーシャルネットワークキングを基盤とした「時間管理術」の関西

圏での自主的勉強会における参与観察や、参加者へのインタビュー調査の分析を行った。

調査の実施期間は2008年6月から2009年3月の間であり、インタビューの対象は一部上場企業に勤務するシステムエンジニアやIT系の起業家等である。

(3) 2009年4月から2010年9月まで筆者が育児休業を取得したため、研究は一時中断し、2010年9月下旬より再開している。

最終研究年度である2010年度は、約半年間という短い研究期間となったが、10月には一橋大学にて「個人化」論の世界的論客であるU.ベック教授の来日記念講演ならびにシンポジウムに参加し、本研究のテーマの一つでもある「個人化」に関する最新の知見を得ることができた。また、11月には大阪樟蔭女子大学にて近年問題化している「新型鬱病」に関するセミナーに出席し、その病態に関する知見を得るとともに、臨床現場においてどのようなケアが行われているのかについて知識社会学的な観点から参与観察を行った。

さらに、2011年1月には広島大学図書館にて精神医療に関する国内外の図書と雑誌を渉猟し、メンタルヘルスケアに関する文献の検証を行っている。特に、「感情資本主義(emotional capitalism)」(E. Illouz)という概念は日本では未だ受容されていないが、国際的に見ても重要な論点であることを明らかにした。

また、2月には京都市にて映画『精神』の上映会と講演会に出席し、精神障害者の社会参加に関する現状と課題について資料収集を行っている。

これらの研究を通して、どのような専門職や枠組みによってビジネスパーソンの感情が解釈・操作されるのか、組織的な感情コントロールはどのように行われるのかについて収集した資料をもとに再構成した。さらに、

合理性や効率性が要求される職場という領域における「不適切な感情」(Hochschild)の発見・解消措置の有り様や現代資本主義社会において感情と効率性が結び付けられる仕方について明らかにしている。

4. 研究成果

(1) 2007年度におけるビジネスパーソンのメンタルヘルスを取り巻く知の布置連関について、EAP会社でのインタビュー調査やメンタルヘルスの現場での参与観察から明らかになったのは、以下の事項である。近年のメンタルヘルスケアにおいては、過重労働と鬱病、過重労働と自殺、鬱病と自殺が相互に分ちがたく結び付けられていること。その契機は電通事件に対する最高裁の判決にあること。電通事件を通して「心の健康リスク」という観点から職場を見直す機運が高まり、従来は社会的政治的領域で議論されてきたような労働問題が労働者個人の「心の健康」問題へと移行していること。

これらの研究成果については、『心の健康』の社会学序説—自殺のリスク化と労働問題の心理学化」(第80回日本社会学会大会, 2007a)と『心理主義化』の再検討」(第58回関西社会学会大会, 2007b)として学会で発表し、「増殖する『心の健康』ネットワーク」(『現代思想』36-3:246, 2008a)ならびに『心の健康』の社会学序説—労働問題の医療化」(『現代社会学』9:41-60, 2008b)として刊行している。

(2) 2008年度におけるフィールドワークから明らかになったのは、以下の事項である。時間管理術を実践する人々の職業は様々であるが、筆者が調査した時間管理術の勉強会のメンバーにはシステムエンジニアが多い。彼らの仕事は従来のように9時—17時で区切ることができず、週に7日・一日24時間追いかけてくる。また、プロジェクトごとに離

合集散するため、メンバー間の意思疎通を図り、仕事を軌道に乗せるための時間的段取りが必要になる。さらに、納期までのスケジュールは非常に厳しく、業務上、常に時間に追われている。こうした仕事を取り巻く環境面の事情に加え、「アート」にも例えられるプログラミングという仕事の特徴が彼らを時間管理術に向かわせる主動因であることが明らかになった。

時間管理術は自己啓発の手段の一つではあるが、1980年代から90年代にかけての自己啓発セミナー的なものや「自分探し」とは位相が異なり、あるのかないのかわからないような「自分」を探したりはしない。時間管理術の概要を説明する際、O氏が人間をコンピューターに例えて話してくれたように、時間管理術においてはむしろ、行為や振る舞いを徹底的に合理化すること（N氏はそれを「自動化」と表現する）を通して、効率良く仕事をしながらプライベートも充実させることができればそれが幸せであり、自分の成長でもあるという考え方がなされる。自己の内面を深く掘り下げたり、自分を探しに旅に出るというのではなく、むしろ、日常生活の中で戦略的に自分をつくっていくことを志向する。時間管理術の実践は、自らの生活や人生を自らの手で設計していこうとする営みであると位置付けることができる。

伊藤美登里によれば、産業社会では資本家や会社が時間の管理者であったが、情報社会においてはそれが個人へとシフトし、「時間の個人化」が生じている。時間管理術の実践においても、時間を管理する主体はあくまでも自分自身である。O氏はインタビューにおいて、時間管理術を習得することが「人生の質や自分を高めることになる」と語った。個人化した社会において、時間を操作対象とみなし、時間を自らの手で舵取りできていると

いう実感が、彼らの自己認識にとって重要な位置を占めている。

これらの研究成果は、「時間管理と自己」（第83回日本社会学会大会, 2010）として学会で発表し、「時間管理と自己—『自分』を設計する」（『現代社会学』11:3-14, 2010）として刊行している。

(3)2010年度は、2007年度来の調査研究について主に「感情資本主義」（E. Illouz）という観点から考察を行っている。産業医やEAPなど、ビジネスパーソンの感情を取り巻く専門職の種類や専門職間のパワーバランスについて整理を行うとともに、ビジネスパーソンのメンタルヘルスケアには「福利厚生としてのメンタルヘルスケア」と「投資としてのメンタルヘルスケア」が混在している現状について明らかにした。

E. イルーズによれば、感情資本主義社会では感情コントロールが自己感覚や能力観の中心に位置するとみなされている。感情資本主義社会のコードにしたがえば、職場で感情的であることはネガティブに評価され、管理されない感情の表出はプロフェッショナルリズムの欠如とみなされ、感情的であることはその人の弱さを示すと解釈される。したがって、自分の感情をコントロールすること、他者の感情について共感的に理解しつつ、それに振り回されない態度を持つことが精神的にも社会的にも強き者・成功者の特徴とみなされる。感情を自制することが他者の気持ちや反応を操作することにつながり、ひいては他者を支配する力になりうる（illouz）。

こうした社会状況の中で、メンタルヘルス不全是、事業主から見た場合、経営上のリスク＝コストである一方、従業員側から見れば自己実現を阻害するリスクである。ここにリスクという概念を介して労使の利害が合致する。現代人は感情に敏感な文化に生きてお

り、職場に限らず日常生活のあらゆる場面で感情管理を行っている。そこでは、感情それ自体の商品化と感情を管理するための知の商品化が生じる。EAP はそうした文化的潮流の中に位置づけられるものでもある。

EAP は公的な社会保険制度が脆弱なアメリカにおいて、私的な企業福祉の一種として発展してきた。日本の現状を見れば、なし崩し的に産業保健の一つとしてEAPが数えられるようになりつつあるが、国家が責任を持って精神障害等の労働災害の補償を行い、その予防として労働条件や職場環境の改善に努めるのか、あるいは民間企業の自由競争にそれらを任せるのかでは描かれる社会像は相当異なる。何が良いのか一概には言えないが、少なくとも近視眼的にうつ病それ自体の予防対策を講ずるだけでなく、その根本にある働く環境や条件等の整備が必要である。

これらの研究成果は、『感情資本主義』社会におけるビジネスパーソンのメンタルヘルスーリスク=コストとしての感情』（第37回日本保健医療社会学会大会・大阪大学）として学会発表を行い、『感情資本主義』社会の分析に向けてーメンタル不全=リスク=コスト』（『現代思想』39-2:214-227, 2011a）ならびに『感情資本主義』の進展ービジネスパーソンのメンタルヘルスケアにおける感情管理』（『社会分析』38:98-115, 2011b）として刊行している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計5件）

- (1) 山田陽子, 2011a, 『感情資本主義』社会の分析に向けてーメンタル不全=リスク=コスト』『現代思想』39-2:214-227, 査読無し
- (2) 山田陽子, 2011b, 『感情資本主義』の進

展ービジネスパーソンのメンタルヘルスケアにおける感情管理』『社会分析』38:98-115, 査読有り

- (3) 山田陽子, 2010, 「時間管理と自己ー『自分』を設計する」『現代社会学』11:3-14, 査読有り
- (4) 山田陽子, 2008a, 「増殖する『心の健康』ネットワーク」『現代思想』36-3:246, 査読無し
- (5) 山田陽子, 2008b, 「『心の健康』の社会学序説ー労働問題の医療化」『現代社会学』9:41-60, 査読有り

〔学会発表〕（計4件）

- (1) 山田陽子, 2011, 「『感情資本主義』社会におけるビジネスパーソンのメンタルヘルスーリスク=コストとしての感情」第37回日本保健医療社会学会大会, 大阪大学, 2011年5月22日
- (2) 山田陽子, 2010, 「時間管理と自己」第83回日本社会学会大会, 名古屋大学, 2010年11月6日
- (3) 山田陽子, 2007a, 「『心の健康』の社会学序説ー自殺のリスク化と労働問題の心理学化」第80回日本社会学会大会, 関東学院大学, 2007年11月18日
- (4) 山田陽子, 2007b, 「『心理主義化』の再検討」第58回関西社会学会大会, 同志社大学, 2007年5月27日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山田 陽子 (YAMADA YOKO)

広島国際学院大学・現代社会学部・講師
研究者番号：10412298